

私部城の歴史

■私部城以前の私部

交野の私部の町は、京都と河内国(現在の大阪東部)の中心部を結ぶ東高野街道の近くにありま。さらに、奈良へ抜ける街道も付近を通り、京都・河内・奈良の中間の交通に便利な場所でした。茶葉の献上を通じて朝廷との関係を保った光通寺が所在し、中世の北河内で栄えた町の一つでした。

■最初の私部城主・安見右近

この地に、歴史上初めて、私部城(交野城)が登場するのは、元龜元年(1570)です。河内国で敵対勢力と戦う織田信長軍に味方した勢力の一つとして、安見右近という人物が私部城主であったと伝えられています。

右近は、もともと河内国守護の畠山家臣団として、交野の星田を拠点としていました。その後、松永久秀の軍勢に加わり、大和国内の合戦に参戦しました。この後、松永久秀が織田信長と友好関係を結ぶ中で織田方についたようです。

織田方についた右近は、織田軍の武将・佐久間信盛の娘と結婚し、男子をもうけています。河内国へ進出してきた織田軍に対し、河内国の在来勢力の中でも安見氏はいち早く関係を深めていました。

私部城が築城された年代の詳細はわかっておらず、織田と松永のいずれにも関係が深い安見右近が、どちらの武将の権力を後盾に私部城を築いたのかははっきりしていません。

■織田と松永の間で

元龜2年(1571)、松永久秀の本拠地・奈良へ呼び出された右近は、久秀によって切腹へ追い込まれました。そして、直後に松永軍は私部城を攻めています。織田軍に接近した右近を殺害し、私部城を奪い取ろうとしたこの事件は、松永久秀による織田に対する裏切り行動ともみられます。この時、城主不在ながら私部城は落城しておらず、守りの堅い城であったことがわかります。

■私部城の戦い

元龜3年(1572)、反織田の姿勢を明確にし、若江城の三好義継と手を組んだ松永久秀は、相城(または付城、城攻めのための砦)も築き、用意周到に再び私部城を攻めました。ただ、この時

も私部城の守りは堅く、三好義継は援軍の要請をしています。

これに対し織田軍は、佐久間信盛や柴田勝家、明智光秀らの大軍を送り、私部城を救援しました。織田軍は2万とも伝わる大軍で押し寄せ、松永の相城を「ししがき」(簡易な柵のような設備)で包囲し撃退しました。これは織田軍の得意戦法の一つで、河内国内の争いで行われたことがわかる珍しい事例です。

この後、松永は本拠地の奈良に追い詰められ、三好義継の若江城も織田軍が奪取しました。織田軍が対松永の戦いで優位に立つ契機がこの私部城の戦いであったともいえます。

■右近の後を守った新七郎と私部城の廃城

右近亡き後の私部城では、安見新七郎が城主をつとめました。右近との関係は不明ですが、城主の急死後に城を堅く守っていることから安見一族の有力人物だったとみられます。信長からの信頼も厚かったようで、信長は堺からの京都への帰路に、新七郎の居所に立ち寄り休息をとっています。

私部城の廃城時期は明記されていませんが、天正3年(1575)の信長の河内平定か、天正8年(1580)の本願寺との講和のいずれかを契機として、役割は終えていたと推測されています。

ただ、織田政権下の交野で安見氏は力を保っており、新七郎は天正9年(1581)の織田信長による京都馬揃えに「取次者」として参加します。「取次者」とは、地域と織田信長の間を取り持つ役目です。重要な軍事パレードである馬揃えに参列したことから、新七郎が北河内の重要人物として活躍し続けたことがわかります。

■私部城以後の安見氏

織田政権下で活躍した私部城の安見氏ですが、豊臣の時代になると消息が不明になります。ただし、現在の愛媛県や石川県で「安見流砲術」で名をなした安見の一族に、交野の安見氏とのつながりが伝えられており注目されます。

なお、江戸時代になると、私部城は「後家が城」とも呼ばれていました。「後家」とは、右近の死後に、安見家中でその息子を守った佐久間信盛の娘のことです。この時の実際の城主は新七郎なのですが、奥さんの存在感は後世に伝えられるほど大きかったようです。



免除川の湿地帯だった空堀(今は田畑となる)に囲まれた本郭の切岸



城跡を西側上空より望む(1994年)



本丸池と伝わる水堀



北を守る堀と考えられる百々川

私部城の構造

■土と瓦の平城

戦国時代の城である私部城は、段丘と谷が入り混じる地形を利用して平地に築かれた土の平城です。大坂城などのような近世の城にみられる石垣は採用されていません。規模は東西300m、南北250mほどで、比較的コンパクトな城です。現在は城の土台の部分が残っており、建物は失われていますが、発掘調査で確認された瓦から、城で瓦を使っていたと考えられています。瓦はもともと寺社に用いるものでしたが、織田信長の安土城をきっかけとして、安土桃山時代に城郭建築に定着します。私部城の瓦はこれを先取るものでした。石垣がない戦国時代特有の土の城の特徴を備えつつも、瓦を使用する点では安土城や大坂城といった近世の城につながる要素もある城です。

■連郭式の構造

私部城では高台の地形を利用したり、一部に盛土をしたりして、「曲輪(郭)」という陣地が置かれています。本郭から四郭まで東西に連なり、「連郭式」と呼ばれる構造をとります。城の中心がはっきりしない構造で、城主の力が卓越したものではなかったことをうかがわせます。郭群の周囲には折れをとまなう堀や曲輪も配置されますが、織田や豊臣の城郭ほどの複雑な構造を備える城ではなかったとみられています。

■堀による守り

郭の周囲に、田畑として残る低地や、池・川の地形は、堀として城を守る役割を果たしました。特に、城の北側から西側には池なども入り混じる低湿地帯が広がります。さらに、城の南

側にも深い谷地形があり、天然の堀となっていたとみられます。さらに郭の周囲には現在は埋没した堀も多く存在しており、こうした多くの堀により城が守られていたとみられます。

■城と町・街道の関係

この城を考えるうえで、私部の町と道は切り離せないものです。私部の町は城に先行してすでに栄えており、城はその町に接するように築かれました。私部の光通寺の棟札や無量光寺の梵鐘の銘文から、築城にあたり両寺院が破壊されたり迫害されたようで、私部の町を取り込もうとした様子もうかがえます。城は私部の町の北端に位置し、隣接して「市」という地名が残っています。城の周囲の町中には、古い街道も通っており、私部の中でもにぎやかな場所に接するように城が築かれたことがわかります。これは、近世以後、城の周辺に城下町が計画されていくのとは逆のあり方です。一定の防御機能も備え、物資も豊富な私部の町を取り込んだことが、平地の城をより堅固にしたのかもしれませんが。

■河内の堅城

私部城はコンパクトでありながら、落城することのなかった守りの堅い城でした。自然地形を利用したことが町に接して築かれたことや、安土桃山時代直前の城郭建築の発展や、鉄砲の普及による城の守り方の変化も影響しているかもしれません。山城はまだ残る大阪府ですが、平城は多くが失われています。その中で、大坂城以前の平城の姿を残す私部城跡は、貴重な文化財です。



昭和36年(1961)の私部城空中写真(国土地理院)まだ城域が良好に残っている(中面の図面と比較してみてください)